

北海道開拓記念館

小村 幸二郎

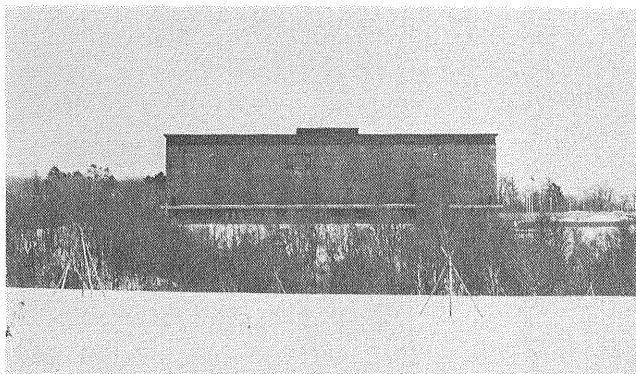
札幌から東へおよそ 15km 温帯と亜寒帯の植生が混りあう原生林を背後に控えた 札幌市白石区厚別町下野幌の丘の上に 北海道開拓記念館が建っている。地力で造られたという赤煉瓦を外壁にした 延床面積 12,945.04m² のこの建物は 春から夏にかけての緑の中でも 秋の紅葉の中でも そして 厳しい白銀の世界にあっても 美しくあたたかいたずまいを見せている。札幌駅前からバスで40分 それから徒歩で20分もかかることがあるこの記念館を訪ずれる人は多く 昭和47年度の入館者数は 312,591 名に達したという。普及課長の矢野牧夫氏は 「昭和46年 4月15日に開館以来見学を目的とした入館者がなかった日はありません。

吹雪の日に交通がとだえた時などは 職員の車で来館者をお送りしたこともありました」と 語った。森林公園の中にあるとはいっても とくに立地条件がよいともいえないこの記念館を これほど多くの人が 吹雪の日でさえも 訪ずれるのは一体なぜだろう。確かに この種の建物がこれまで北海道にはなかったことや 北海道開拓 100 年を記念して建てられたことからみれば 入館者が多いのもうなづけそうである。

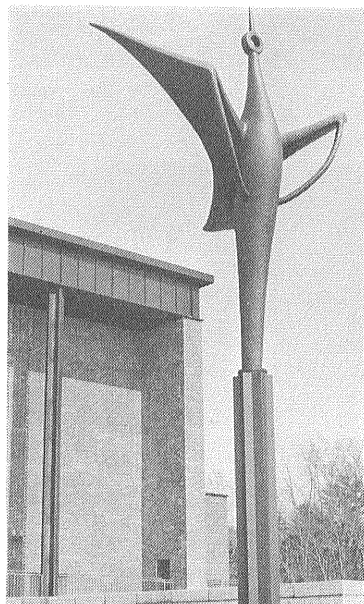
しかし これだけ多くの人たちが訪ずれるのは 自分たちの生活の場の移り変りの実態を知り きびしい自然条件に打勝ちつつそれに順応し かつ 絶えず前進するための何かを創造し改造しながら 荒涼の地の開拓に成功した先人たちの生き方を見つめ 今後の北海道はいかにあるべきかを考えようとする人たちに 露出展示を中

心として 積極的に応える展示・陳列が 特別のテーマによって行なわれているからではなかろうか。いわゆる 従来の網羅的展示・陳列を主とする博物館的内容を可能な限り拒否し 人間の生活とその生活の場との深いかかわりあいを中心的テーマとし それに従って物を展示・陳列し 入館者の知識欲に応えるとともに 未来について深く考えさせるという手法が この記念館の存在価値を高め そして 多くの人が訪ずれる根本的理由になっているように思える。展示費用だけでも およそ 3 億 3 千万円を要したといわれる展示・陳列が 北海道における人間生活のはじまる以前から未来像にわたる 7 テーマによって行なわれていることからみれば 誰もがこのように思うだろう。そして ここを訪ずれる人は恐らく例外なく 正面に立つ鶴のブロンズ像を見た時 館内の展示・陳列のあり方と 北海道開拓記念館のもつ意義を感じとるにちがいない。

森林公園バス停に降り立つと 静かな丘の上にひっそりと建つ北海道開拓記念館が 白銀の中に 美しい姿を見せていた(第1図)。原生林に沿って登る道は 不思議なことに 乾ききっている。人影もなれば走り



第1図 北海道開拓記念館の遠望



第2図 「羽ばたき」 正面玄関前に立つブロンズ像で 鶴が天に向かって羽ばたく様を形どっている

抜ける自動車もない。 足音を打消すように 原生林を 鳴らして 冷たい風が吹き抜けてゆく。

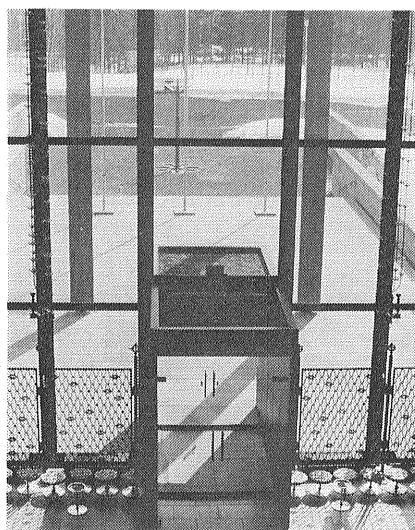
正面玄関前に 妙な形をしたブロンズ像が立ち 赤煉瓦の建物と原生林との接点にでもなっているように 全体の景観を見事に引き締めている(第2図)。 真冬の北海道に渡来する典型的な鳥として知られる鶴 また アイヌ民俗舞踊の一つ「鶴の舞」の素朴さの中にも 人の心をうつ美しい鶴の姿に感銘を受けて 新製作協会会員の山内壮夫氏が制作したみごとなブロンズ像である。 天に向かって羽ばたくこの鶴は まるで 無限に発展する北海道の姿と きびしい冬の寒さの中にあって 優美に舞い そして 訪ずれることを決して忘れまいとする人の心を象徴しているようだ。 「羽ばたき」と名付けられたこの像の前で手を打ってみると 不思議なことに 鳥が羽ばたく音とまったく同じように 反響した。 恐らく このブロンズ像を支える柱と雪の結晶を形どった

基礎部とは この反響を見こして 形・大きさなどが決められたのだろう。

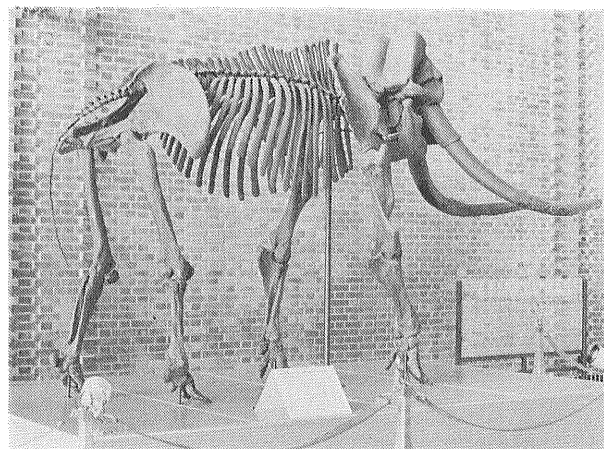
ハメコロシの高いガラス窓を通す光で明るい玄関ロビーの両側に 大形動物の骨格模型が 左右に1体ずつ 展示されており 正面には 北海道を象徴する雪の結晶を表現する 美事なダペストリーが飾ってある (第3 4 5 6図)。 カウンター式の受付に立つお嬢さんのコパルトブルーの鮮やかな色は 赤煉瓦の壁の色彩や展示物などの色彩を考慮して決められたのだろうが 雄大な北海道の天空を想わせるさわやかな色である(第7図)。



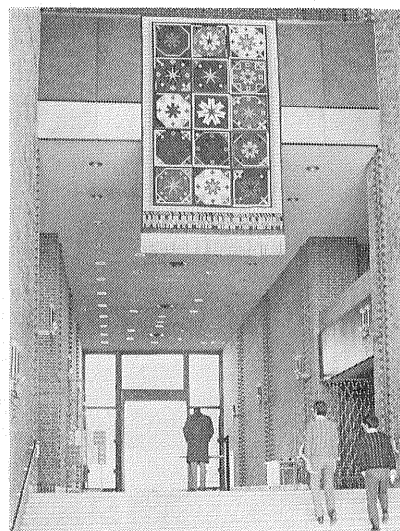
第3図 正面玄関 旗棒の手前に立っているのは「羽ばたき」の像



第4図 玄関ロビーから見た正面玄関 ハメコロシのガラス窓が2階の高さまであり ロビーを明るくしている 玄関(中央)の両側には 椅子が並んでいて 休息の場となっている



第5図 忠類産ナウマン象化石の復原・複製 ロビー左側に展示してあり 右側には 恐竜アロザウルスの化石の復原・複製が展示してある



第6図 ロビー正面のダペストリ 雪の結晶を表わす模様で作ってある

この受付を左へ曲ると 展示への導入部に当る広い空間があり 人工衛星が撮影した北海道地域の写真を巨大に引伸したものを展示物の一つとした壁面をバックに 北海道の立体地形模型が置かれ 頭上には 北海道の冬のきびしさを象徴する雪を表現している金属製のパイプが無数に吊されている(第8図)。 広くそして高い吹抜けの空間にどっしりとした展示物 こまごまとした展示物や解説を一切省いたこの象徴的空間は もっとも新しい展示の手法によって 北海道の自然のきびしさと先人の苦労とを 卒直明快に表現しているようである。

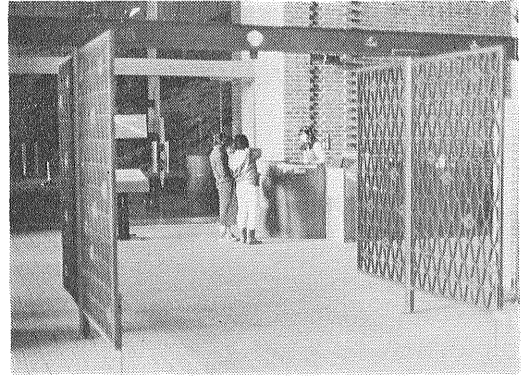
展示は 常設展示・特別展示・収蔵展示に大別されている。

常設展示は 3,000m²の面積を占め 下記のテーマと約2,000点の展示物によって行なわれている。

- 1:北の夜明け 2:先住の人びと 3:新天地を求めて
- 4:開けゆく大地 5:産業のあゆみ 6:北のくらし
- 7:新しい北海道

「北の夜明け」をテーマとする展示のはじめは ナウマン象化石の分布図と化石の産出状態・牙・歯のレプリカなどである(第9図)。 牙のレプリカ作成費が20万円 歯のレプリカ作成費が7万円ということだが 今ではとてもこの価格では作れないだろう。 それにしてもなぜ 象を最初の展示物にしてあるのだろうか。 もしかしたら 「象は熱帯圏にしか棲んでいない」という先入観にとらわれているにちがいない入館者の心理を逆用して 展示効果を挙げ 入館者の郷土の変遷に関する興味をかきたてるための演出かもしれない。

このコーナーには 寒帯の動物を主とするジオラマが幾つかあるが そうした動物の動きには細心の注意が払



第7図 受付風景 常設展示は 左奥(暗くみえる部分)からはじまる

われていて 美しさの中に 生態学的知識の普及に 大きな役割を果たしている。

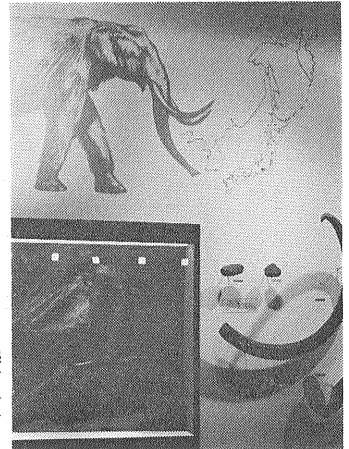
「先住の人びと」を テーマとする展示の中心は アイヌの家と生活の様子の一部を再現した展示物である。 実物大の家の中には等身大の人物模型や調度品が置かれ 軒先近くには 鱈の干物さえ展示されている。 今は完全に干乾びて 魚の臭も完全に失せているが 展示当初は 生臭くて大変だったらしい。

しかし 干物の作り方を知らない人や たとえ作っても 乾場させない都会に住む人たちにとっては 魚の生臭さは 案外 古い良き時代を偲ばせる何より優れた展示物の一つかもしれないし また 都会っ子にとっては 働くことの尊さを教える得がたい教材の一つかもしれない。 展示物を見ていてまず気がつくことは 既設の博物館で採用されている展示とは異なって 手で触れることによって損傷を受けやすい貴重な物は別として 多く



第8図

テーマ展示への導入部に当る空間 左壁の写真は 人工衛星が撮影した北海道付近の写真を引伸したもの 空間の中央には 北海道の立体地形模型が置かれその上部には 雪を象徴する無数の金属製パイプが吊されている



第9図

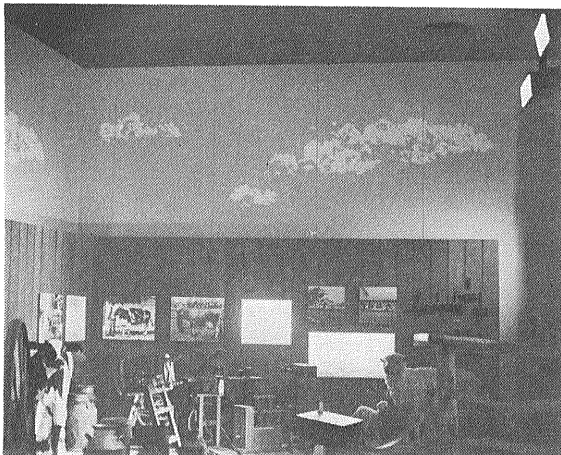
「北の夜明け」をテーマとする展示のはじまり ナウマン象の姿態図 化石分布図 化石産出状態を示すレプリカが露出展示してある

の展示物がむき出しになっていることである。このような展示方法は一般に露出展示と呼ばれ、手で触れたり持上げたり臭いを嗅いだりして展示物の性状を認識させることができるので、一つの理想的な展示方法である(第10 11図)。

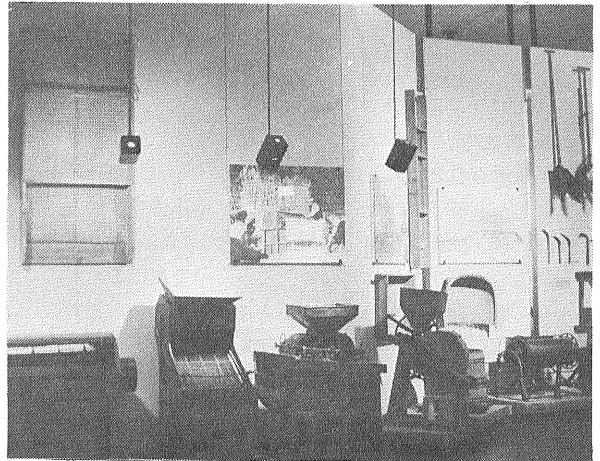
「新天地を求めて」をテーマとする展示は、和人とアイヌの出逢い、戦い、和人の北海道探検などが中心となっている。当時成立した松前藩の人々の生活を示す衣類や調度品も珍しく、和人とアイヌの抗争の歴史を示す数々の展示物には考えさせられることが多いが、自然科学に関係ある人にとっては、当時の探検に使用された測量器具類は興味深い(第12図)。

「開けゆく大地」をテーマとする展示は、開拓使

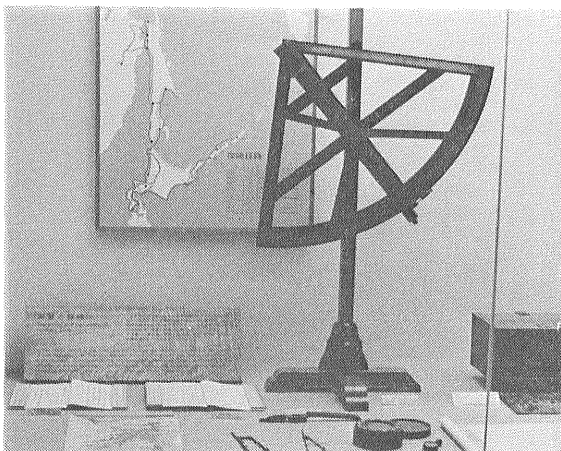
の設置を再現する実物大の立派な門をはじめ、開拓移民による入植地の開墾を示すジオラマ(第13図)、航路や鉄道の発達状況を示す展示物を中心に展開されている。陽の光を通さないほどに茂る巨木に向かって斧を振り下ろす男のたくましい姿、赤ん坊をおんぶした少女の肩を抱く母親、丸太組みの粗末な小屋など、このジオラマは生きる人々のたくましさと愛の姿を、人間と植物というたった2種類の展示物によって力強く語りかけている。「開けゆく大地」というテーマは、もちろん北海道開拓の初期を中心に設定されたものではあるが、高度な文明に恵まれて生活するわれわれにとっては、今後の「開けゆく大地」にどのように対処すべきかを考えさせるテーマでもあろう。少なくとも、残り少ない未開の大地を今後どのように開いてゆくべきかは、あり余る自然にすっぽりと包まれていた大地を開くことよりは数段む



第10図 露出展示の一例 農機具や家畜の剥製などがむき出しに展示され、壁面には機器の使用風景などを示す内照式の大型スライドが設備されている。解説文などはほとんど割愛されているので、見学者の疲労度は少ない。



第11図 露出展示の一例 照明灯は必要に応じて角度を変えられるようになっている。



第12図 探検時代に用いられた測量器具類や、当時の地図、古文書



第13図 開拓時代の開墾状況を示すジオラマ

ずかしい。大地を開くことは必要である。しかしそれはあくまでも人々の生活の物心両面にわたる豊かさを確保しそして生命を永らえるという絶対条件を満たすものでなければならない。

「産業のあゆみ」をテーマとする展示は明治初期から昭和初期までの産業の変遷を中心に 漁業・農業・林業・鉱業・工業に用いられた機器類やそれらの使用状況を示す写真や造形物などによって行なわれている。木材を乗せた轆を曳くたくましい馬を中心にしたジオラマは北海道開拓の主役が馬であったことを卒直に物語っておりこれらの馬に対する道民の敬意は記念ホールの一隅に蹄鉄の壁を設けることによって表わされている。

後志地方の泊村の鯨漁の様子を中心としたジオラマは決して大規模ではないが往時の殷賑を想わせ鯨の一匹に至るまで構成するすべての物は精巧に作られている。

恐らくこのジオラマを見る人たちの多くはジオラマの製作費がいかに高いかにつかぬかもしれない。

このコーナーの一角には模擬坑道があり(第14図)この坑道を通り過ぎるとウォールケースの中に北海道産のおもな鉱石が鉱床分布図・鉱山の風景写真・使用器具類と一緒に展示されている(第15図)。一見標本の少なさが気にならぬがこの展示は多分収蔵展示への導入部としての役割を果たしているであろう。

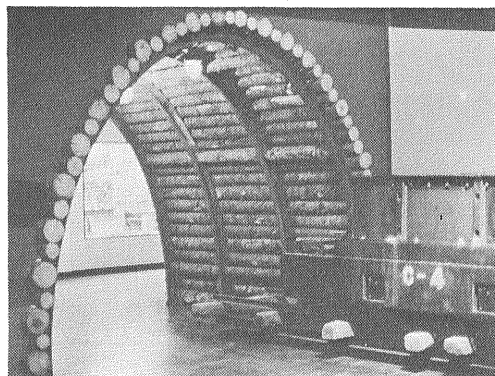
「北のくらし」をテーマとする展示は過去100年間の生活の移り変りを生活用具・衣類・生活状況を示す写真などによって行なわれている。今はもう道内でもほとんど見られなくなったダルマ・ストーブのある客車内部を示す大型展示物は職業や貧富の差を示していると思われる様々の服装をした老若男女の等身大乗客

像とともに過ぎ去った日の姿をみごとに再現している。ナレーションは地元の方言でなされているので完全には聞きとれないこともあるがそれだけに一層の親しみを感じさせる。どの人物像を見ても実におだやかな顔付なのはこの時代には富者も貧者も逆境の中でさえ善に満ちた心をもってそれなりの平和な暮らしを送っていたことの表われなのかもしれない。

「新しい北海道」のテーマは過去の遺産でありそして未来への出発点である現在の姿を3面のスクリーンに書き出される映像によって表現するいわゆる映像展示によってうたわれている。3台の映写機と11台のスライド・プロジェクターは完全自動になっており変化に富む美しい画像をスクリーン一面にまたは断続的に書き出していた。

映像展示設備は近年新しい展示法の一つとして新設の博物館などでは積極的に採用されている。展示物がなくしかも映画やスライドを中心にするということでもだに思われそうなこのような室は講堂や集会場など多目的に使えるし映像設備はミクロの世界を巨大化して見せるなど一般の標本による展示では不可能な展示を可能にするという点でも重要な役割を果たす。特別展示は年に2~3回それぞれ30~50日の期間で面積500m²の独立した特別展示室で行なわれている。昭和47年度の特別展示観覧者数は39,824人で展示内容によって観覧数にはかなりのひらきがあるらしい。地質学関係の特別展示としてはアンモナイト展北海道地図今昔展など興味深い展示が行なわれたことがある。

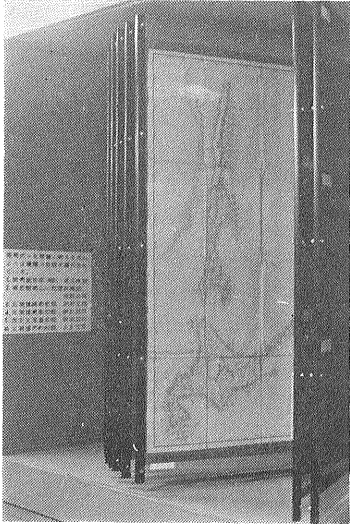
常設展示を見てさらに深く知りたい意欲をもった人や研究者のために収蔵展示が行なわれている。400m²の収蔵展示室には約5,000点の各種の資・試料が整然と展示されている(第16 17 18 19図)。地学関係



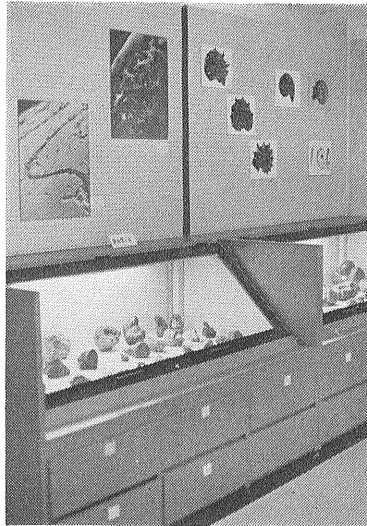
第14図 「産業のあゆみ」の部分に作られた 模擬坑道と炭車を引張ったバッテリーカー



第15図 鉱石や鉱山用具 鉱山分布図などの展示



第16図 収蔵展示の一部にある古地図類 特製の
のパインダーに入れて見やすく 展示
面積を節約できるように工夫されてい
る



第17図 収蔵展示の地学部門にあるアンモナイト化石
と写真 下の引出しには交換用・研究用の標
本が入っている

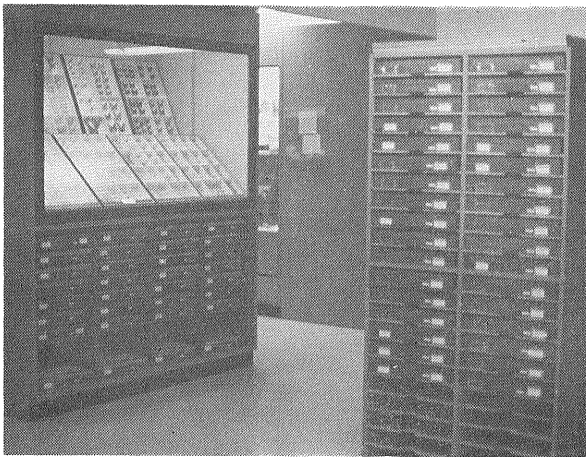
の展示物としてもっとも興味をそそ
られるのは 主として炭田地帯から
産出したアンモナイト化石と地図類
である。

収蔵展示用の資・試料は 一定期
間の展示を終って 交換されており
交換用資・試料のほとんどは 第16
～第19図でも分るように 下段の引
出しに納められているが 普通の状
態では損傷されやすい貴重な古文書
や衣類などは 恒温・恒湿状態にあ
る収蔵庫に納められている。

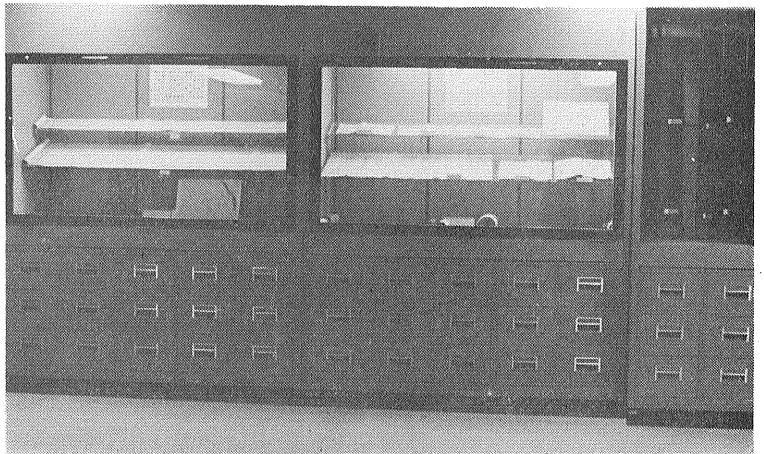
以上の展示室のほかに体験学習室
がある。面積 120m² のこの室内
には 農機具その他 多種多様の展
示物があり 観覧者は 自由に 展
示物を実際に動かしたり 叩いたり
壊したり 組立てたり できるよう

になっている。こうした室と設備は 従来の博物館な
どにはあまり設けられていないが 物の原理を学び ま
た 物の性質を知る上において とくに児童たちの科学
心を養う上において 重要な役割を果しているように思
える。地質系の標本館などでは 岩石や鉱石の重さや
割れ方など 様々の性質に関する知識と体験を取得させ
る上で このような室は必要にちがいない。

標本館や博物館においては 多種多様かつ多数の標本
類を どのように収蔵すればよいかか その任務を全う
する上においてまず解決されなければならない問題とな
るが 本館においては 380m²の恒温・恒湿室を含む
1,700m²の収蔵庫が設けられ 約32,000点の資・試料が



第18図 収蔵展示の一角にある昆虫標本 木製
の標本棚の中に 交換用・研究用の標
本が入っている

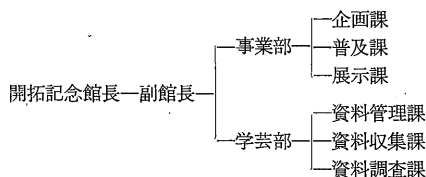


第19図
収蔵展示の一角にある古文書の展示
恒温恒湿状態におくほど重要ではない
ので 鋼鉄製のケースに展示してある

種類別に分類収蔵されている。

以上の展示のほか 講演会・講習会・映画会などがひんばんに行なわれており 科学に関する知識の普及に大きな成果を挙げているが 情報サービスの一つとして 文献や資料のコピーサービスも計画されている。

本館は北海道庁生活環境部の所属機関になっており 次のような機構によって運営されている。なお 昭和48年度の定員は45名であったが その他16名の非常勤職員の子が主として受付・案内等に従事している。



北海道開拓記念館について そのあらましを述べてきたが 大規模で内容が充実し しかも 過去をふり返り過去の遺産である現在を見つめ そして これらを基盤とする未来の発展への期待がこめられているこの立派な建物のすべてを語りつくすことは この少ない紙数ではむずかしく 舌足らずの紹介文になってしまった。

見学を終えて表へ出た。葉をすっかり落した原生林をわずかに鳴らして 冷たい風が吹き抜けてゆく。乾ききった道路を 美しい開拓記念塔へ向って 歩いてみたが 開拓記念館のはずれで その道路は深い雪の下になっていた(第20図)。

バス停への道すがら 近年急速に数を増している博物館等について 考えていた。博物館が文教面で大きな役割を果していることは疑ない事実であり そうした意味でも 博物館の増加は 喜ばしい現象であろう。しかし 古くから 欧米諸国が素晴らしい博物館をもっていたのにくらべて 日本では博物館を主体とする活動があまりにも貧弱であったことを想うとき そして 博物館設立の意義が偉大な先人の遺産を守り 伝へ 研究して 将来への糧とすることにあることを想うとき むしろ 博物館活動の貧困さは その国の平穏な姿を象徴していると思えないこともない。

たとえば ヨーロッパの代表的博物館は建物といい展示物といい 古い伝統をもつだけに 素晴らしいが そうした博物館をもっている国の多くが 隣国と国境を接し度重なる動乱を経験していることに目を向けたとき 博物館の存在とその建設時期とが その国が不穏な状況下にあったことと 先人の遺産を守る手段としての表われ

であると考えられないだろうか。こういう見方が成立つとすれば 隣国と遠く海を隔てる日本において世界的な博物館が設置されていなかったということは 国土全体が博物館的要素をもっていたということになるのではなからうか。近年の博物館あるいは博物館類の建物の著しい増加をこの裏面から見れば こういう建物を積極的に建てて遺産を保存しなければならないほど 国土全体が博物館的性格を、急速に失ないつつあることを物語っているように思えてならないし また 人手に触れないままの先人の遺産を 訪ねるだけのゆとりがないことを 示しているように思えてならない。

現在の世相からみれば 国土の開発はさらに進むにちがいない。そして 国土を知り 先人の遺産を知り より豊かな生活を保つための糧の一つとしてそれらを将来に役立てようとするならば 可能な限り より大きくより内容の充実した博物館や標本館を設置して 古くからの遺産を守り 研究し 役立て 後世に伝える努力が必要であろう。

開拓100年を記念に 未来の発展への知識の足がかりになることを念じて 建設された北海道開拓記念館には こうした意味を含めて 学ぶべき点が数多くあるように思える。

時間的にゆとりの少ない入館者の多くは 陳列・展示物などの珍しさや 美しさだけに ひかれがちであるが ぜひそうしたものゝ意義や 資・試料の収集・整理・研究・展示などに 日夜努力している人達の懸念な姿にも 目を向けていただきたいと思う。

(筆者は 鉱床部)



第20図 開拓記念館の近くにある 開拓記念塔